

# 一夕話

芥川龍之介

青空文庫



「何しろこの頃は油断ごころがならない。和田わださえ芸者を知っているんだから。」

藤井ふじいと云う弁護士は、老酒ラオチユの盃さかずきを干してから、大仰おおぎように一

同の顔を見まわした。円卓テエブルのまわりを囲んでいるのは同じ学校

の寄宿舎とうとうていにいた、我々六人の中年ちゆうねん者ものである。場所は日比谷ひびやの

陶陶亭とうとうていの二階、時は六月のある雨の夜、——勿論もちろん藤井のこう

いったのは、もうそろそろ我々の顔にも、酔色すいしよくの見え出した

時分である。

「僕はそいつを見せつけられた時には、実際こんじやく今昔ひまの感に堪え

なかつたね。——」

藤井は面白そうに弁じ続けた。

「医科の和田といった日には、柔道の選手で、まかないせいばつ 賄征伐の大

将で、リヴィングストンの崇拜家で、かんちゆう 寒中 ひとえもの 一重物で通した

男で、—— いちこん 一言にいえば ごうけつ 豪傑だったじゃないか？ それが君、

芸者を知っているんだ。しかも やなぎばし 柳橋の こ 小えんという、——」

「君はこの頃 かし 河岸を変えたのかい？」

突然 よこやり 横槍を入れたのは、いぬま 飯沼という銀行の支店長だった。

「河岸を変えた？ なぜ？」

「君がつれて行った時なんだろう、和田がその芸者に遇あったとい

うのは？」

「早まつちやいけな。誰が和田なんぞをつれて行くもんか。——」

「  
藤井は昂然こうぜんと眉を挙げた。

「あれは先月の幾日だったかな？ 何でも月曜か火曜だったがね。久しぶりに和田と顔を合せると、浅草へ行こうというじゃないか？ 浅草はあんまりぞつとしないが、親愛なる旧友のいう事だから、僕も素直に賛成してさ。真まつ昼間六区びるまろつくへ出かけたんだ。――」

「すると活動写真の中にでもい合せたのか？」  
今度はわたしが先くぐりをした。

「活動写真ならばまだ好いいが、メリイ・ゴオ・ラウンドと来ているんだ。おまけに二人とも木馬の上へ、ちゃんと跨またがっていたんだからな。今考えても莫迦ばか莫迦ばかしい次第しだいさ。しかしそれも僕の発議ほつぎ

じやない。あんまり和田が乗りたがるから、おつき合いにちよいと乗つて見たんだ。——だがあいつは楽じやないぜ。野口のぐちのような胃弱は乗らないが好いい。」

「子供じやあるまいし。木馬になんぞ乗るやつがあるもんか？」

野口という大学教授は、青黒い松スノホア花を頬張つたなり、蔑さげすむよ

うな笑い方をした。が、藤井は無頓着むとんじやくに、時々和田へ目をやつては、得々とくとくと話を続けて行つた。

「和田の乗つたのは白い木馬、僕の乗つたのは赤い木馬なんだが、楽隊と一しよにまわり出された時には、どうなる事かと思つたね。尻は躍るし、目はまわるし、振り落されないだけが見つけものなんだ。が、その中でも目についたのは、欄干らんかんの外そとの見物の間に、

芸者らしい女が交まじっている。色の蒼白い、目の沾うるんだ、どこか妙な憂鬱な、——」

「それだけわかっていれば大丈夫だ。目がまわったも怪しいもんだぜ。」

飯沼はもう一度口を挟んだ。

「だからその中でもどいつているじやないか？ 髪は勿論銀杏いちよう返がえし、なりは薄青い縞しまのセルに、何か更紗さらさの帯だったかと思う、とにかく花柳かりゆうしやうせつ小説の挿絵さしえのような、楚々そそたる女が立っているんだ。するとその女が、——どうしたと思う？ 僕の顔をちらりと見るなり、正に媽然えんぜんと一いつしやう笑したんだ。おやと思つたが間まに合わない。こっちは木馬に乗っているんだから、たちまち女の

前は通りすぎてしまう。誰だったかなと思う時には、もうわが赤い木馬の前へ、楽隊の連中が現れている。――」

我々は皆笑い出した。

「二度目もやはり同じ事さ。また女がにつこりする。と思うと見えなくなる。跡はただ前後左右に、木馬が跳ねたり、馬車が躍ったり、然らずんば喇叭がぶかぶかいたり、太鼓がどどん鳴っているだけなんだ。――僕はつらつらそう思ったね。これは人生の象徴だ。我々は皆同じように実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇っても、掴まえない内にすれ違ってしまう。もし『幸福』を掴まえる気ならば、一思いに木馬を飛び下りるが好い。――」

「まさかほんとうに飛び下りはしまいな？」

からかうようにこういったのは、木村という電気会社の技師長  
 だった。

「冗談じょうだん いっちゃいけない。哲学は哲学、人生は人生さ。――

所がそんな事を考えている内に、三度目になったと思ひ給え。そ  
 の時ふと気がついて見ると、――これには僕も驚いたね。あの女  
 が笑顔えがおを見せていたのは、残念ながら僕にじやない。 賄まかない 征せい ば

伐つの大将、リヴィングストンの崇拜家、ETC. ETC. ……ドクタ

ア和田長平わだりようへいにだったんだ。」

「しかしまあ哲学通りに、飛び下りなかつただけ仕合せだったよ  
 。」

無口な野口も冗談をいった。しかし藤井は相不変話を続けるのに熱中していた。

「和田のやつも女の前へ来ると、きつと嬉しそうに御時宜おじぎをしている。それがまたこう及び腰に、白い木馬に跨またがつたまま、ネクタイだけ前へぶらさげてね。——」

「嘘をつけ。」

和田もとうとう沈黙を破った。彼はさつきから苦笑くしやうをしては、  
老酒ラオチュばかりひっかけたのである。

「何、嘘なんぞつくもんか。——が、その時はまだ好いいんだ。いよいよメリイ・ゴオ・ラウンドを出たとなると、和田は僕も忘れたように、女とばかりしやべっているじゃないか？ 女も先生先

生といっている。埋まらない役まわりは僕一人さ。——」

「なるほど、これは珍談だな。——おい、君、こうなればもう今夜の会費は、そつくり君に持つて貰うぜ。」

飯沼は大きい魚翅イウツウの鉢へ、銀の匙さじを突きこみながら、隣にいる和田をふり返った。

「莫迦ばかな。あの女は友だちの囲いものなんだ。」

和田は両肘りょうひじをついたまま、ぶつきらぼうにいい放った。彼の顔は見渡した所、一座の誰よりも日に焼けている。目鼻立ちも甚だ都会じみていない。その上五分刈ごぶがりに刈りこんだ頭は、ほとんど岩石のように丈夫そうである。彼は昔ある対校試合に、左の臂ひじを挫くじきながら、五人までも敵を投げた事があった。——そうい

う往年の豪傑ごうけつぶりは、黒い背広せびろに縞のズボンという、当世流行のなりはしていても、どこかにありありと残っている。

「飯沼！ 君の囲い者じゃないか？」

藤井は額ひたいご越しに相手を見ると、にやりと酔よった人の微笑を洩もらした。

「そうかも知れない。」

飯沼は冷然と受け流してから、もう一度和田をふり返った。

「誰たれだい、その友だちというのは？」

「若槻わかつきという実業家だが、——この中でも誰か知っていはしな

いか？ 慶けい応おうか何か卒業してから、今じや自分の銀行へ出てい

る、年配も我々と同じくらいの男だ。色の白い、優しい目をした、

短い髭ひげを生やしている、——そうさな、まあ一言いちごんにいえば、風

流愛すべき好男子だろう。」

わかつきみねたろう

「若槻峯太郎、俳号はいごうは青蓋せいがいじゃないか？」

わたしは横合はさいから口を挟はさんだ。その若槻という実業家とは、わたしもつい四五日前まえ、一しよに芝居を見ていたからである。

「そうだ。青蓋せいがい句集くしゅうというのを出している、——あの男が小え

んの檀那だんななんだ。いや、一月ふたつきほど前まえまでは檀那だんなだったんだ。今

じゃ全然手を切っているが、——」

「へええ、じゃあの若槻という人は、——」

「僕の中学時代の同窓なんだ。」

「これはいよいよ穩おだやかじゃない。」

藤井はまた陽気な声を出した。

「君は我々が知らない間に、その中学時代の同窓なるものと、花を折り柳に攀じ、——」

「莫迦をいえ。僕があの子に会ったのは、大学病院へやって来た時に、若槻にもちよいと頼まれていたから、便宜を図ってやっただけなんだ。蓄膿症ちくのうしょうか何かの手術だったが、——」

和田は老酒ラオチュをぐいとやってから、妙に考え深い目つきになつた。

「しかしあの女は面白いやつだ。」

「惚れたかね？」

木村は静かにひやかした。

「それはあるいは惚れたかも知れない。あるいはまたちつとも惚れなかつたかも知れない。が、そんな事よりも話したいのは、あの女と若槻との関係なんだ。——」

和田はこう前置きをしてから、いつにない雄弁ゆうべんを振り出した。

「僕は藤井の話した通り、この間偶然あいだ小えんに遇つた。所が遇つて話して見ると、小えんはもう二月ほど前に、若槻と別れたというじゃないか？ なぜ別れたと訊きいて見ても、返事らしい返事は何もしない。ただ寂しそうに笑いながら、もともとわたしはあの人のように、風流人ふうりゆうじんじやないんですというんだ。

「僕もその時は立入つても訊きかず、夫それなり別れてしまつたんだが、つい昨日きのう、——昨日は午過ぎひるは雨が降つていたろう。あの雨の最さ

いちゆう

中に若槻わかつきから、飯を食いに来ないかという手紙なんだ。ち

ようど僕も暇だったし、早めに若槻の家へ行つて見ると、先生は

気の利きいた六畳の書齋に、相あいか不わ変ら悠ず々と読書をしている。僕は

この通り野蛮やばんじん人だから、風流の何たるかは全然知らない。しか

し若槻の書齋へはいると、芸術的とか何とかいうのは、こういう

暮としだろうという気がするんだ。まず床とこの間まにはいつ行つても、

古い懸かけもの物が懸かつている。花も始終絶やした事はない。書物も和

書の本箱のほかに、洋書の書棚も並べてある。おまけに華き奢やしな

机しの側みには、三味線しゃみせんも時々は出してあるんだ。その上そこにい

る若槻自身も、どこか当世うきよの浮世うきよ絵えじみた、通つう人じんらしいなりを

している。昨日きのうも妙な着物を着ているから、それは何だねと訊きい

て見ると、チャンパ占城という物だと答えるじゃないか？ 僕の友だち多しといえども、チャンパ占城なぞという着物を着ているものは、若槻を除いては一人もあるまい。——まずあの男の暮しぶりといえ、万事こういった調子なんだ。

「僕はその日膳ひぜんを前に、若槻とけんしゆう献酬を重ねながら、小えんとのいきさつを聞かされたんだ。小えんにはほかに男がある。それはまあ格かくべつ別驚かずとも好よい。が、その相手は何かと思えば、浪なにわぶしかたにかた花節語りの下したつ端ぱなんだそう。君たちもこんな話を聞いたら、小えんの愚ぐを晒わらわずにはいられないだろう。僕も実際その時には、苦く笑しょうさえ出来ないくらいだった。

「君たちは勿論知らないが、小えんは若槻に三年この方、随分尽

して貰っている。若槻は小えんの母親ばかりか、妹の面倒も見てやっていた。そのまた小えん自身にも、読み書きといわず芸事げいごとといわず、何でも好きな事を仕込ませていた。小えんは踊りも名を取っている。長唄ながうたも柳橋やなぎばしでは指折りだそうだ。そのほか発句ほつくも出来るというし、千蔭流ちかげりゆうとかの仮名かも上手だという。それも皆若槻のおかげなんだ。そういう消息を知っている僕は、君たちさえ笑しょうし止しに思う以上、呆あきれ返らざるを得ないじゃないか？

「若槻は僕にこういうんだ。何、あの女と別れるくらいは、別に何とも思っていないません。が、わたしは出来る限り、あの女の教育に尽して来ました。どうか何事にも理解の届いた、趣味の広い女に仕立ててやりたい、——そういう希望を持っていたのです。」

それだけに今度はがっかりしました。何も男を拵こしらえるのなら、浪花節語りには限らないものを。あんなに芸事には身を入れていても、根性の卑いやしきは直らないかと思うと、實際苦にが々しい気がするのです。……………

「若槻わかつきはまたこうもいうんだ。あの女はこの半年はんとしばかり、多少ヒステリックにもなっていたのでしよう。一時はほとんど毎日のように、今日限り三味線を持たないとかいつては、子供のよう

に泣いていました。それがまたなぜだと訊たずねて見ると、わたしはあの女を好いていない、遊芸を習わせるのもそのためだなどと、妙な理窟をいい出すのです。そんな時はわたしが何といつても、耳みみにかける気色けしきさえありません。ただもうわたしは薄情だと、そ

ればかり口惜しくやそうに繰返すのです。もつとも発作ほっささえすんでしまえば、いつも笑い話になるのですが、……：

「若槻はまたこうもいうんだ。何でも相手の浪花節語りは、始末に終えない乱暴者だそうです。前に馴染なじみだった鳥屋の女中に、男か何か出来た時には、その女中と立ち廻りの喧嘩をした上、大怪おお我けがをさせたというじゃありませんか？ このほかにもまだあの男には、無理心中むりしんじゆうをしかけた事だの、師匠ししやうの娘と駈落ちかけおをした事だの、いろいろ悪い噂うわさも聞いています。そんな男に引懸ひっかかるというのは一体どういう量りようけん見みなのでしよう。……：

「僕は小えんこの不しだらには、呆れ返あきらざるを得ないと云った。しかし若槻の話はなしを聞いている内に、だんだん僕を動かして来たの

は、小えんに対する同情なんだ。なるほど若槻は檀那<sup>だんな</sup>としては、当世稀<sup>まれ</sup>に見る通人かも知れない。が、あの女と別れるくらいは、何でもありませんといっているじゃないか？ たといそれは辞令<sup>じれい</sup>にしても、猛烈な執<sup>しゅう</sup>着<sup>じやく</sup>はないに違いない。猛烈な、——たとえばその浪花節語りは、女の薄情を憎む余り、大怪我をさせたという事だろう。僕は小えんの身になつて見れば、上品でも冷淡な若槻よりも、下品でも猛烈な浪花節語りに、打ち込むのが自然だと考えるんだ。小えんは諸芸を仕込ませるのも、若槻に愛のない証拠だといった。僕はこの言葉の中にも、ヒステリーばかりを見ようとはしない。小えんはやはり若槻との間<sup>あいだ</sup>に、ギャップのある事を知っていたんだ。

「しかし僕も小えんのために、浪花節語りと出来た事を祝福しようとは思っていない。幸福になるか不幸になるか、それはどちらともいわれないだろう。——が、もし不幸になるとすれば、呪わのろるべきものは男じゃない。小えんをそこに至らしめた、通人つうじん若わ槻かつき青せい蓋がいだと思ふ。若槻は——いや、当世の通人はいずれも個人として考えれば、愛すべき人間に相違あるまい。彼等は芭蕉ばしやうを理解している。レオ・トルストイを理解している。池大雅いけのたいがを理解している。武者小路実篤むしやのこうじさねあつを理解している。カアル・マルクスを理解している。しかしそれが何になるんだ？ 彼等は猛烈な恋愛を知らない。猛烈な創造の歓喜を知らない。猛烈な道徳的情熱を知らない。猛烈な、——およそこの地球を莊嚴にすべき、

猛烈な何物も知らずにいるんだ。そこに彼等の致命傷ちめいししょうもあれば、彼等の害毒も潜ひそんでいると思う。害毒の一つは能動的に、他人をも通人に変らせてしまう。害毒の二つは反動的に、一層いつそう他人を俗にする事だ。小えんの如きはその例じゃないか？ 昔から喉のどの渴かわいているものは、泥どろみず水でも飲むときまっている。小えんも若槻に囲われていなければ、浪花節語りとは出来なかつたかも知れない。

「もしまた幸福になるとすれば、——いや、あるいは若槻の代りに、浪花節語りを得た事だけでも、幸福は確たしかに幸福だろう。さつき藤井がいったじゃないか？ 我々は皆同じように、実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇つても、掴つか

まえない内にすれ違つてしまふ。もし『幸福』を掴まえる気ならば、一ひとおも 思いに木馬を飛び下りるが好い。——いわば小えんも一思いに、実生活の木馬を飛び下りたんだ。この猛烈な歡喜や苦痛は、若槻如き通人の知る所じやない。僕は人生の価値を思うと、百の若槻には唾つばを吐いても、一の小えんを尊つばびたいんだ。

「君たちはそう思わないか？」

和田は酔すい眼がんを輝かせながら、声のない一座を見まわした。が、藤井はいつものまにか、円テエブル卓テエブルに首を垂らしたなり、気楽そうにぐつすり眠ねこんでいた。

(大正十一年六月)





# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 一夕話

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>